

巻頭
インタビュー

紺野 美沙子さん

女優
UNDP 親善大使

数字からでは見えてこない

人々の姿を伝えたい

女優として活躍される一方、国連開発計画（UNDP）の親善大使を務める紺野美沙子さん。親善大使として各地を訪れ、国際協力の現場や現地の人々の暮らしをテレビやラジオの出演やインタビュー、執筆活動、講演などを通して伝えている紺野さんにお話をうかがいました。

国連開発計画（UNDP）の 親善大使として

親善大使になったきっかけは、1998年にUNDPのニューヨーク本部から突然届いた就任依頼のファクスでした。その前年に、外務省のODA（政府開発援助）に関する番組でインドとネパールを訪ねたことはあったのですが、国際協力は未経験の世界。まさに青天のへききでしたが、一女優として、またふつうの主婦や母親の視点で、途上国で見たこと感じたことを伝えることができればとお引き受けしました。

1日1・25ドル以下で暮らす最貧困層の人々が地球上で5人に1人いると聞いても、実際にそうした暮らしを想像することは難しいですね。スラム

1 カンボジアのメモル村では日本政府のODAで作られた井戸により、子どもたちは遠くまで水汲みに行かなくてすむようになった

2 モンゴルの特産品の一つ、はちみつの生産現場を訪問



3 タンザニアのムワンザでは、太陽光発電プロジェクトにより
明かりがとるようになった教室でたくさんの学生が学んでいる

や、電気もガスも水道も病院も学校もない場所で暮らす人々が、世界にはたくさんいる。数字からでは見えてこないそんな人々の姿を、親善大使として伝えていきたいと思っています。

どんな地域にも、 みんな一緒に日常がある

親善大使としてこれまでに9つの国・地域を訪問してきましたが、それぞれに印象深い驚きや発見がたくさん

ありました。

昨年は、パキスタンを訪ねました。行く前は、テロが頻発して治安が悪かったり、内戦があったり、怖いところといったイメージもありました。でも、どんな地域に行っても、そこに住む人たちの日常の暮らしがある。「僕たちはここで普通に暮らしているんだ、そんな危ない国だと思わないでくれ」と。

アフリカも、それぞれの地域で文化や民族は違うし、トイレがあるほうが珍しい地域もあります。それでも、親が子を思う気持ちは一緒です。お母さんは子どものために一生懸命ご飯を作っているし、少しでもいい教育を受けさせてやりたいと思って頑張っている。実際に現地に行かないと気づかないこともたくさんあるんです。百聞は一見にしかずですね。

世界を知ること 日本が分かる

日本の常識と、海外に出たときの常識や現実があまりに違いすぎると感じることもあります。自分の子どもたちの世代を見ると、ごみを出すことや使い捨てることに対する罪悪感がないうですね。それが当たり前になって

いて、このままで大丈夫かなと心配になります。小さい頃から世界の中の日本という視点を教えることで、子どもたちの意識も変わってくるのではないのでしょうか。

世界を知ること
で、いかに自分たちが恵まれているかが分かるし、日本に生まれたからこそできること、やらなくてはいけないことが見えてくる。日本の若い人たちが「やりたいことが見つからない」なんて言っているのはもったいないですよ。

環境教育ももつ

と早い時期から行って、地球環境のことを子どもたちに分かってほしいな。世界のことを知っているのと知らないのではやはり違うし、それに問題意識をもって、みんなが少しずつ変えようと思えば、大きな力に

4 パキスタンの震災孤児が暮らすセンター。子どもたちに笑顔が戻り、将来の夢を語るようになってきた



なるのですから。

先進国の論理だけでなく、 それぞれの歴史や文化を

途上国でも、ブータン王国のように環境問題に力を入れているところも

紺野 美沙子さんが

親善大使として訪れた国・地域

1999年5月 カンボジア

親善大使として初めてカンボジアを訪問。地雷除去センターや身体障害者工芸センターなどを視察。

2000年7月 パレスチナ

UNDPの支援により開校した小学校や、ガザ地区の難民キャンプなどを視察。

2001年6月 ブータン

レモンガラスオイル製造プロジェクトなどを視察したほか、国連人口基金（UNFPA）の親善大使でもある王妃と謁見。

2003年8月 ガーナ

HIV／エイズ孤児支援プロジェクトの一つクween・マザー協会（イスタン州）の里親制度や、IT機器を載せたバスが各地を回る移動IT教室プロジェクト、アクラ服飾生産訓練センターなどを視察。

2004年7月 東ティモール

元兵士への農業訓練や技術訓練、地方復興プロジェクトのほか、公益財団法人オイスカが中心となり実施した農業訓練プログラムも視察。

2005年8月 ベトナム

チーランナム鳥類保護区域の管理・保全活動プロジェクトや、若者によるベトナム文化遺産保護・修復プロジェクトなどを視察。女性の地位向上や持続可能な環境についての意見交換会にも参加。

2006年8月 モンゴル

特産品づくりを支援する一村一品プロジェクト（写真 2）や草原保存プロジェクト、環境にやさしい住居プロジェクトなどを視察。

2007年8月 カンボジア

HIV／エイズとともに生きる女性のための手工芸品センター、トンレサップ湖の生態系保全と湖周辺の村落の人々の生計手段を守るプログラム、村落給水プロジェクト（写真 1）などを視察。

2008年8月 タンザニア

ムワンザで進められる太陽光発電プロジェクト（写真 3）や、HIV／エイズとともに生きる人々を支援するプロジェクト、貧困削減・環境保全のモデル事業であるユヴィキタ青年の村などを視察。

2010年8月 パキスタン

パキスタン人とアフガン難民が居住する難民受入地域プログラムや、2005年に起きた地震からの復興プロジェクト（写真 4）などを視察。

【写真提供（1～4）】UNDP／篠田 伸二

？

国連開発計画（UNDP）親善大使って？

国連開発計画（United Nations Development Programme）は、開発途上国の開発援助を行う国連の機関。親善大使は紺野さんのほか、テニスプレイヤーのマリア・シャラポアさん、サッカー選手のロナウドさんなど、世界で9人が任命されている。紺野さんは、これまでに9つの国・地域を訪問（左表参照）。2004年に訪問した東ティモールでは、8ページに紹介する公益財団法人オイスカが中心となって実施した農業訓練プログラムの現場も視察した。

あつてさまざまなのですが、先進国の経済至上主義が、途上国を翻弄（ほんろう）していることも少なくないと感じます。

森林の伐採や利益率の高い作物の植え付けなどは、生態系への影響がありますが、地域の雇用とも関係しているので難しい問題ですね。途上国の人たちは、確かに経済的には貧しいかもしれませんが、それぞれの歴史や文化の中で、淡々と暮らしている。まずは、住民の皆さんに敬意を表すことが大切だと思います。

お互いの違いを認め合える世の中に

東日本大震災後、豊かさってなんだろうと改めて考えるようになりました。物やお金がいっぱいある……。それがいい人もいるでしょう。でも、自分の役割や居場所があつて、そこで心穏やかに過ごせることこそが、とてもありがたいことです。

国民総幸福量（*1）という独自の指標で心の豊かさを計っているブータンに行ったとき、「足るを知る」という

ことを実感しましたが、金子みすゞさんの詩のように、「みんなちがって、みんないい」んですよ（*2）。お互いの違いを認め合えるような、途上国も先進国もみんながWin-Winの関係になるような、そんな世の中になっていければいいと思っています。

*1 国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）は、生活水準だけでなく心理的幸福などの項目も調査して人々の幸福度を示すもの。

*2 金子みすゞ「わたしと小鳥とすずとより」。

こんの みさこ

東京都出身。慶應義塾大学卒業。大学在学中に俳優デビュー。以後、テレビや映画、舞台で活躍。1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、アジア・アフリカの各国を視察。著書に、親善大使としての訪問記をまとめた『ラララ親善大使』（小学館、2008年）がある。2010年10月から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。朗読と影絵や映像・音楽などさまざまなジャンルのアートとの公演を定期的に続けている。

